

研究主題「自閉的傾向のある生徒の不適応行動を改善する指導に関する研究

～『行動の理解と対応』インデックス・シートを活用して～

東京都教職員研修センター 研修部専門研修課
都立南大沢学園養護学校 教諭 川崎 淳子

研究のねらい

自閉症は、コミュニケーションや情報処理の能力に課題があることが多いが、適切な対応や配慮を行うことにより集団での活動や社会生活に適応できるようになる場合が多い。そのためには、一人一人の障害特性に合わせた対応や配慮等を行うことが必要であるが、適切な対応が行われなかった場合、それが刺激となりパニック等の不適応行動を誘発させることもある。生徒の混乱を避けるためにはかかわる教員が不適応行動への理解を深め、また教員間で対応を共通理解し、指導・支援にあたることが重要である。

こうした考えに基づき、現在の養護学校中学部、高等部での指導の状況を分析してみると、複数担任制や教科毎に異なる教員が指導する体制であるにもかかわらず、生徒の障害特性の理解や指導上の配慮事項を共通理解するためのケース会や手だてが十分に設けられておらず、不適応行動に対して共通の課題意識を持ちにくい等の現状がある。本研究は、こうした現状を踏まえて、自閉的傾向の特性に対する教員の理解を促し、指導にかかわる教員が共通の課題解決の手だてを持てるような「行動の理解と対応」インデックス・シートを作成し、活用を通して不適応行動への指導の改善を図ることを研究のねらいとした。

研究の内容・方法

基礎研究：自閉症に関する先行研究や実践の整理・分析

- ・自閉症の障害特性や不適応行動の整理と定義付け
- ・「ペアレント・トレーニング」についての分析
- ・広汎性発達障害の感覚過敏やパニックへの対応についての理解

調査研究：対象…養護学校の中学部・高等部に在籍する自閉的傾向のある生徒5人とその担任5人

- ・自閉的傾向のある生徒の不適応行動について、担任への意識調査
- ・インデックス・シートの活用についての検証調査

研究の経過と考察

1 思春期における自閉症の障害特性

はじめに、自閉的傾向の理解や不適応行動の理由を考える際に不可欠である自閉症の障害特性を「DSM - 」等を通じた文献研究や調査研究の結果から、以下のようにまとめた。

対人関係の障害	常同的な行動、興味、活動	コミュニケーションの障害
諸感覚の過敏	思春期の衝動	

自閉症の基本的な障害特性である「対人関係の障害」、「コミュニケーションの障害」、「常同的な行動、興味、活動」の3項目に加え、本研究では近年アスペルガー症候群の研究によって明らかになりつつある「諸感覚の過敏」と、調査対象のほとんどの生徒に見られた思春期の行動の変容を「思春期の衝動」として取り上げ、これら5項目を本研究における自閉症の障害特性として位置付けることとした。

2 「社会的不適応行動」の定義

インデックス・シートを作成するにあたって、指導の対象となる不適応行動の様子を明らかにし「自閉的傾向のある生徒の不適応行動」を定義付けるために、調査研究を行った。調査結

果には、「スムーズな社会生活を難しくする行動」、「障害の有無にかかわらず、一般社会で受け入れられない行動」、「人間関係に摩擦を生じたり、本人の安全の支障となる行動」であるという意見が多く見られ、教員が生徒の不適応行動を「一般的な社会生活に支障のある行動」であるととらえていることが明らかになった。さらに、本研究において一般的な社会生活を円滑に送るために必要な要素を考察したところ、「マナーを身に付ける」ことや「公共のルールを守る」こと等が含まれることが明らかになった。そこで、自閉的傾向のある生徒の不適応行動を次のように定義し、研究を進めることとした。

「人とのかかわりや社会生活上のマナー、公共のルール等にふさわしくない行動」

3 思春期における自閉症の障害特性から考察する不適応行動の様子

不適応行動の様子は、思春期における自閉症の障害特性と不適応行動の定義に当てはまるものとして基礎研究や調査研究から5区分41項目に整理し下表のようにまとめた。インデックス・シートには、これら41項目の不適応行動への対応方法を項目ごとにまとめ、記入した。なお、対応方法の一例を欄外に参考として示した。(インデックス・シートについては、 - 5 参照)

< 思春期における自閉的傾向のある生徒の不適応行動の様子 >

対人関係の障害

順番を守れないことが多い。
人が怒ったり嫌がることを繰り返して、してしまう。
あいさつをしない(できない)。
服をきちんと着られない。
視線を合わせ、握手など体に触られることを嫌う。
待つことが苦手である。
大きな集団での活動に不適応を起こす。
最後まで役割を果たせないことが多い。

の対応例：「ここまで」をはっきり伝える。

常同的な行動、興味、活動

手をヒラヒラさせる、体を揺さぶる等の行動がある。
厳格な儀式的行為や強固なこだわりがある。
予定の変更にスムーズに対応することが難しい。
自分の要求を力づくでもやろうとする。
水等特定の感触に対する、こだわりがある。

の対応例：視覚的なサポート等で活動に見通しを持たせる。

コミュニケーションの障害

指示を正しく理解して行動することが難しい。
かんしゃくを起こす。
一定の時間、課題に集中することが難しい。
あいさつができない。

の対応例：具体的なことばで短く伝える。

諸感覚の過敏

光の変化に敏感に反応する。
影や反射、回っているものなどに注目し続ける。
特定のものや色等に過剰に反応する。
大きな、または突然の音に反応する。
特定の人の声に過剰に反応する。
通常食べられないものを食べる。
触られることに対して攻撃的に反応することがある。
水等特定の感触に対する、こだわり遊びがある。
一度に多くの情報を把握してしまうために、周りの状況を把握することが難しい。
嫌いな音が聞こえないように歌ったり声を出したりする。
極端な偏食等食事に関する問題がある。
衣服等の特定の感触に執着する(または極端に嫌う)。
歯みがきや髪をとかすことを嫌う。
気温の変化に対応できない。
嘔吐き、食べ物の反芻等の感覚遊びがある。

の対応例：声のトーン(高低・強弱・速さ等)に気をつけ、冷静に対応する。

思春期の衝動

こだわりが強くなる。
場面をわきまえず、自慰等の性的行動が見られる。
周りの人に要求を強いる行動が強化される。
不安から手をヒラヒラさせる、体を揺さぶる等の常同行動が強化される。
過去の出来事を思い出し、パニックを起こす。
異性に付きまとう。
自分を傷つける(手をかむ、頭を叩く等)。
一定の時間静かに座ってられない。
反抗的(挑戦的)な行動をとる。

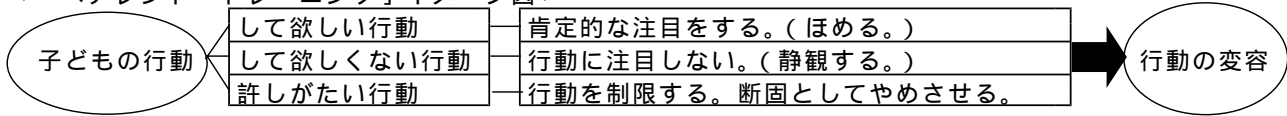
の対応例：サインや言葉等、適切な方法で要求を伝えるように促す。

4 「ペアレント・トレーニング」の活用

次に、不適応行動への対処の方法を検討するために、基本的な方法として「ペアレント・トレーニング」についての分析を行った。「ペアレント・トレーニング」とは、UCLA神経精神医学研究所において開発されたプログラムで、東京都教育相談センターにおいても実施され、効果を上げている。この技法は、支援者が子どもの行動を「して欲しい行動」、「して欲しくない行動」、「許しがたい行動」に分類し、「肯定的な注目をする(ほめる)」ことや、ほめる行動が現

れるのを待つために「注目をしない(静観する)」こと、「行動に制限を設ける」ことによって子どもの行動を望ましい方向に変容させようとするものである。

<「ペアレント・トレーニング」イメージ図>



このプログラムは、保護者が子どもに対して行うことを基本としているため、学校での実践には用語等に修正を要する箇所もあるが、子どもの様々な行動に直接的に働きかける方法であることや技法がわかりやすく、他の指導と組み合わせやすいこと、日常生活の中で活用し共通理解を図りやすい方法であることから、不適応行動への対応方法として適切であると考え、インデックス・シートにも取り入れ活用することとした。

5 「行動の理解と対応」インデックス・シートの作成

(1) 作成上の留意点

インデックス・シートの作成にあたっては、次の点について留意し、作成を進めた。

- ・ 不適応行動の原因を、周りの配慮等によって改善できるものとしてとらえること。
- ・ 支援者が不適応行動を客観的にとらえることを促すものであること。
- ・ 不適応行動への指導の手だてが、行動への対処にとどまらず、生徒との関係の見直しや生徒の認知の幅を広げる等、段階的な指導へとつながるものであること。
- ・ 日常生活の中で比較的多く見られる不適応行動について取り上げ、実用性を高めること。
- ・ 形が見やすくコンパクトで、日常の指導や支援に使いやすいものであること。

(2) インデックス・シートの項目

インデックス・シートの項目は、上記の留意点を考慮に入れ5項目に設定した。

「不適応行動の様子」 「予想される理由」 「不適応行動への対応」
 「不適応行動を軽減させる指導や配慮等」 「対象生徒の受け入れやすい指導や言葉かけ」
 「不適応行動の様子」と「予想される理由」

「不適応行動の様子」と「予想される理由」は並べて設定することとした。それは、教員が

<インデックス・シート例>

・待つことが苦手である。	何をしたらよいか分からない。 いつまで待つのが見通しがもてない。 自分の気持ちをコントロールできない。
・「いつまで」をはっきり分かるように示す。 待っている間に取り組むものを用意する。	
・日常生活や学習の中に交代する活動を組み入れる等、段階的に待つ力を身に付ける指導を行う。 待とうという姿勢が少しでも見えたらほめる。	

不適応行動を客観的に理解し、それまでの指導の振り返りや次の指導の手だてを考える機会につなげるためである。不適応行動の内容や理由については、所属校の指導記録を基に、文献研究や調査研究から明らかにした。

「不適応行動への対応」と「不適応行動を軽減させる指導や配慮等」

不適応行動への対応には、生徒がその行動を中断し意識を他

へ向けるように促す等の短期的な対応と、個別指導計画を活用して段階的な指導を進め、行動の変容を図る長期的な対応がある。どちらの対応も同様に重要であるが、認知の指導は長期的に様々な領域・教科で行われるため、共通理解や継続した指導がより難しいと言える。しかし、身に付けた知識・技能の一般化が困難である自閉的傾向の生徒が、不適応行動を軽減し社会参

加にふさわしい年齢に合った態度や行動を身に付けていくためには、生徒の実態にあわせて指導を段階的に積み上げることが不可欠である。そのため、インデックス・シートにも短期的な対応である「不適応行動への対応」と長期的な対応の内容である「不適応行動を軽減させる指導や配慮等」の欄を分けて設定し、教員が不適応行動への指導や対応を整理して考え、長期的な対応へも意識を向けやすいように工夫した。

「対象生徒の受け入れやすい指導や言葉かけ」

自閉的傾向のある生徒の障害特性は個々によって異なるため、インデックス・シートをより有効に活用するために、教員が言葉かけや個別の配慮等を書き込める欄を設けることとした。これによって、インデックス・シートの内容がより生徒の実態に即したものになり、活用の幅も広がるものとする。

6 インデックス・シートの活用

自閉的傾向のある生徒の担任に、不適応行動に対する指導の際にインデックス・シートを活用するよう依頼した。下の表は、担任がインデックス・シートを活用して作成した指導計画の展開例である。担任はインデックス・シートを用いて生徒の不適応行動の理由を理解し、これに基づき目標を設定している。また、インデックス・シートの「不適応行動への対応」から指導の手だてを導き出している。なお、現在、生徒の著しい変容は見られないが、担任の指導に一貫性が得られ、不適応行動が拡大することはなくなっている。

< 指導計画の展開例 >

対象：A養護学校中学部第3学年生徒

「ペアレントトレーニング」の
注目しない方法

不適応行動の様子	行動の理由	目標	指導の手だて	指導場面
・帰りの会の途中、会の進行を中断するような発言を繰り返す。	・いつ帰りの会が終わるのが見通せない。	・帰りの会に最後まで参加できるようになる。	・会を中断する発言や行動に注目しない。 ・見通しが持てるように、会の進行表を提示する。	・帰りの会
「して欲しくない」行動に分類	「対人関係の障害」「待つことが苦手。」から予想される理由。			「不適応行動への対応」から

研究の検証と成果

インデックス・シートの有効性についてのアンケート調査では、対象の教員から次のような意見を得た。

- ・生徒の行動と対応について、基本に戻って考えることができる。
- ・基本となる指導方法がある程度明らかになることで、担任以外の教員が共通理解を図りやすくなり、より適切な形で指導を行える。
- ・教員が段階を追って指導することの大切さを知ることができる。
- ・行動の理由を理解することができ、冷静な対応を取りやすくなる。

これらの調査から、インデックス・シートの活用が教員間の共通理解や、生徒の行動理解に有効であると教員がとらえていることが把握できた。また、「冷静な対応を取りやすくなる」等、生徒との関係の見直しにも有効であるとする意見も得られ、本研究における成果としてまとめることができた。

今後の課題

以上の研究の成果を踏まえ、今後はインデックス・シートの活用の幅を広げ、より有効性を高めていくために、以下の課題について取り組んでいきたいと考える。

実践の中で、インデックス・シートを活用した指導の改善について継続的に検証する。

インデックス・シートを進級・進学における担任間の引継ぎや、保護者への助言等にも活用できるよう内容を充実させていく。